⑤　前田の女同行

【歓喜の余滴】　１３０　　昭和二年　四月二十二日

九時頃　前田から女同行が二人来られ、聞けども求むれども大悲の勅命は聞こえず、永遠に聖人様と離れて行かねばならんか、何故この心が受付けてくれないのであろうかと熱心に求めていた。

数時間に亘って自分が教化されつつある様に　泣きの涙で話した。

宿善開発の時が来たのか、大悲の御催しに預かったとでも言うべきか、何の猶予もなく、何の疑懼もなく、あら！　大悲の親様は泣く泣く堕ちる私一人の為でございましたか、悪人の儘とはこのまんまでございましたかと大慶びし、帰る時には、今日からは主人も喜んでくれましょう、先日以来私が煩悶を続けていますので、折角製鉄所から帰って食膳に向った時　私が溜息をついて主人にまづい思いをさし、心の中では寺嫌いな主人がいなかったら　自由に参詣が出来るであろうと殺していましたが、恐ろしい悪魔は私でございます、自由に出してくれなかった主人が遂に御親に逢わしてくれた大善知識でございました。　此の上からは主人を大切に感謝の日暮をせずにはいられませんと言って帰ったが、嗚呼親様はどんなにお喜びだろうか。又私を導いて下さった知識に感謝せずにはいられない。

（付記）　その後主人は半年経たぬ間にこの世を去ったが、会う度に　先生去年と今年と代わっていたら私はどうなる事でしたろうか、苦悩の心を抱き、而も主人に離れたら悶死するに違いありませんが、無明の闇の中の灯明台たる御親の念力に逢わして下さったから、悲しい中にも大悲に動かされ、三人の子供を夫に代わって荷い、製鉄所で愉快に働かして戴いていますと。